

共同研究 ● ポスト社会主義以後の社会変容——比較民族誌的研究 (2008-2011)



ロシア経済が好調な時に新築された村の学校(ロシア連邦ノバロフスク地方コンドン村にて、2009年秋)

研究の目的

ソ連が崩壊してはや20年の歳月が流れた。冷戦の終結とソ連崩壊、それから2000年までの10年間にわたって続いた、旧ソ連諸国、東欧、モンゴルで起きた政治経済的な混迷もはや「歴史」となりつつある。21世紀に入ると各国、各地域が独自の歩みを始め、1990年代のようなソ連型社会主義国であったことによる共通性が薄れていった。そのために、社会主義体制という共通の政治経済体制を経験しているという歴史的な事実だけで、この地域の現状を一括して分析、理解することが困難になりつつある。それどころか、社会主義体制の経験や事実に対する人々の記憶すら薄れつつある。

しかし、だからといって、現在これらの国々で進行している政治経済現象や社会現象がかつての社会主義とまったく無縁であるわけではない。いくつかの国で起きている国家体制の混乱にも、資源を巡る利権争いにも、文化復興運動にも、そこが社会主義体制だったからこそ見られる共通の状況がある。本研究会では、「ポスト社会主義的」といわれてきたこれらの国や地域に暮らす人々の生活現場における変化に焦点を当てながら、「ポスト『ポスト社会主義』的」といわれる21世紀の政治経済情勢下における、多様な社会変容、文化変容の比較研究を行う。そして、旧社会主義体制にあった国々や地域の、21世紀の状況を分析するための概念や理論的な枠組みを鍛え上げていくことを目的としている。

1990年代から2000年代にかけて顕著になった政治経済情勢の変化には、中央政府の統制強化、経済成長と社会格差の拡大、国家による資源独占、政府主導の歴史認識の再構築、政策的な「伝統文化」復興、EUとNATOの東方拡大、対テロ対

策に伴う対米関係の変化、そして一部の国における民主主義の成熟または破綻などがある。本研究会では、このような情勢の変化の下で、ポスト社会主義を経験し、2000年代を生きる人々の生活現場で何が起きていたのか、彼らの社会や文化がどのように変化したのか、その変化の原動力は何だったのかを地域横断的に比較する。それによって、生活現場におけるかつての社会主義という体制の持つ意味を再検討するとともに、「スラブ・ユーラシア地域」とも呼ばれるこの地域を研究対象として再編することも目指す。

このような研究目的に沿って、本共同研究では次のよう

なテーマを掲げている。

- (1) 開発：プーチン政権後の急速な経済復興に伴って進む開発(資源開発、工業化)に対する、対象とされた地域住民のリアクションの比較研究。地域経済・地域社会の再編、地域・コミュニティ内での格差拡大などを取り上げる。
- (2) 復興：「伝統」復興の時間的、地域的比較研究。宗教の復興と振興(キリスト教、仏教、イスラーム、シャマニズム)、伝統文化の可視化・定型化(伝統的生産形態の強調)などの問題を取り上げる。
- (3) 統合と対立：地域の再統合、統合される地域間の対立、住民の居住地域または所属集団または社会的範疇に対するアイデンティティの変化。グルジア紛争、EU・NATOの東方拡大、経済格差と結びついた住民間の対立などの問題を取り上げる。

研究の実績と成果

2008年度と2009年度に実施した研究会は以下の通りである。

2008年10月4日(土)、5日(日) 国立民族学博物館

- 佐々木史郎「研究会の概要説明」
- 渡邊日「問題提起」
- 全員「これまでの研究概要紹介」

2009年3月15日(日)、16日(月) 国立民族学博物館

- 神原ゆうこ「スロバキアの文化復興運動」
- フロリアン・ステムラー「ヤマロ・ネネツ自治管区におけるトナカイ遊牧と石油天然ガス開発」
- アンナ・ステムラー＝ゴスマン「西シベリアにおける先住民族の権利」

2009年6月6日(土)、7日(日) 東京大学駒場
キャンパス

- 伊賀上菜穂「ブリヤート共和国におけるロシア正教古儀式派の宗教組織展開」
- オリガ・A・シャグラノヴァ「都市環境におけるブリヤート・シャーマニズムの現象」
- 神長英輔「サハリン州を読む：儀礼装置としての地域ニュースウェブサイト」

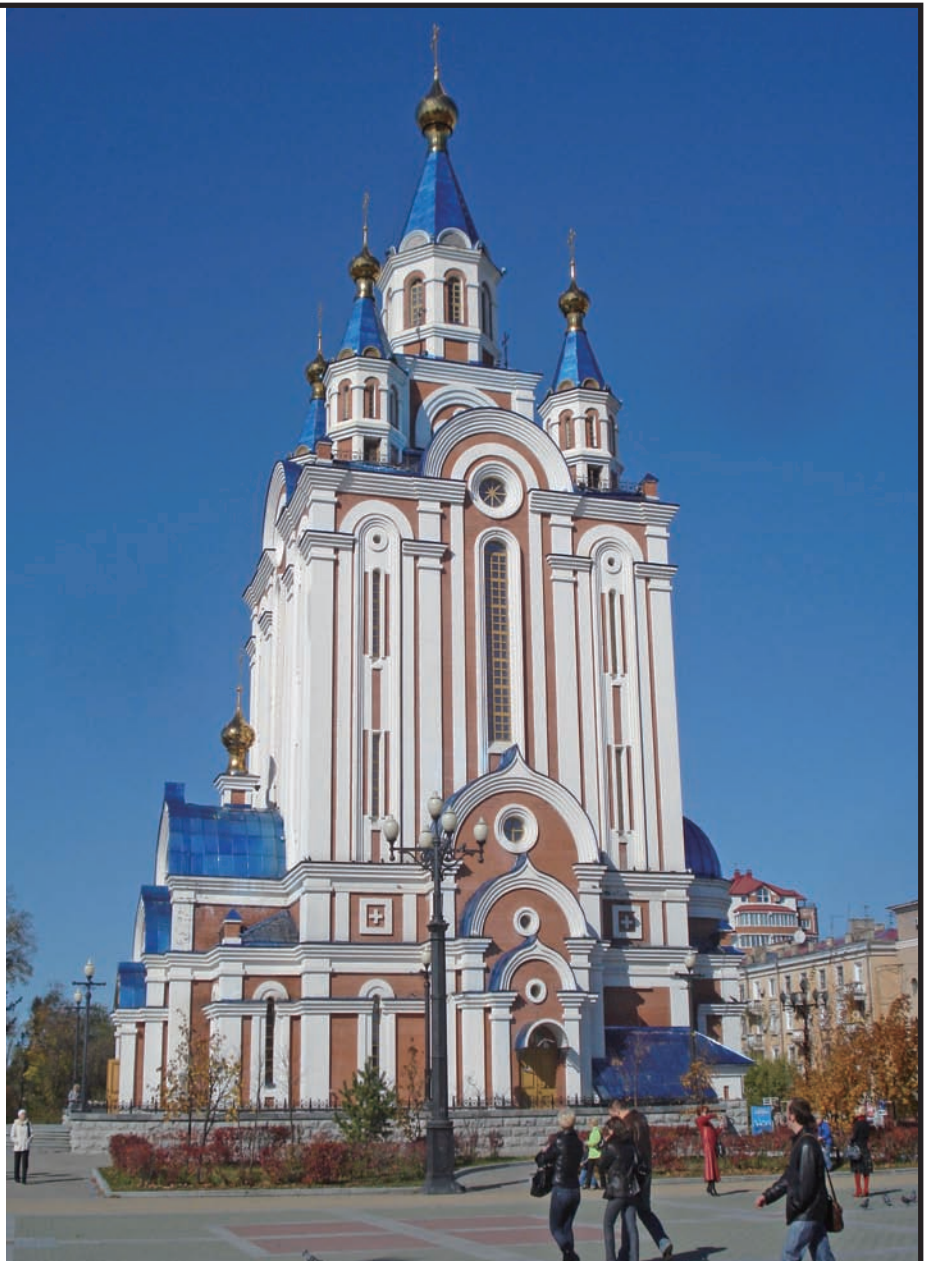
2009年11月28日(土)国立民族学博物館

- 藤原潤子「東シベリアにおける生産活動と環境変動」
- 新免光比呂「東欧の宗教——キリスト教の布教と展開を中心として——」
- 吉村貴之「アルメニアとトルコの『歴史的和解』はなるか」

2008年度、2009年度の1年半の間での議論をまとめると、まず、最も多く取り上げられたのがポスト社会主義期における宗教の問題である。これは「復興」というテーマにかかわる。東欧における正教会、カトリック、プロテスタントの新しい布教活動の動き、ロシア正教会の中でも迫害されて特殊な立場に置かれた古儀式派と呼ばれる人々のシベリア、極東における現状、シベリアの先住民の間に見られる新しいシャーマニズムの広がりが取り上げられた。それぞれ取り上げられる宗教も、それを担う人々の政治的、文化的背景も異なるために、「ポスト社会主義後の宗教問題」として一括して扱うことはできないが、それでもソ連型社会主義を経験し、その時代にソ連が標準化した無宗教政策の洗礼を受けているところに問題の出発点があるという点は共有されている。これらの事例を比較することで、まったく性格を異にする様々な宗教を押さえ、束ねていた社会主義時代の無宗教政策の性質の一端が見えるとともに、多様化の幅を広げるポスト社会主義後の旧ソ連、東欧、モンゴル地域の多様化の過程を追うことも可能である。

「開発」というテーマに関わるポスト社会主義期後の経済活動の活性化と環境についての問題も2人の報告者に取り上げられた。これらの問題の淵源はすでにソ連時代にあり、当時鉄のカーテンの陰で繰り広げられた環境破壊の実態がソ連崩壊で一旦は暴露された。グローバル化した市場経済はそれを是正するどころか、逆に悪化させる結果をもたらしたが、他方で、開発現場に暮らす人々は、先住民か移民かを問わず、資源を求めて流れ込む資金の恩恵を受けてきたことも事実である。開発の拡大に伴う伝統的な活動領域の縮小、温暖化による洪水など、生活を破壊しかねない影響がありながら、グローバル経済との繋がりを断っては生きていけない、そこに暮らす人々の現実を如実に浮き上がらせてくれた。

「統合と対立」に関わる報告も3本あった。シベリア先住民の定義と権利の問題、極東におけるWebをつかった情報の流れに関する問題、そして100年以上たった今でもトルコとアルメニアの間に抜きがたいとげのように刺さる「アルメニア



ハバロフスクの中心部にそびえ立つ教会。

人虐殺」の歴史問題である。アルメニアとトルコの歴史問題に代表されるように、このテーマに関わる諸問題は古い時代の事実根ざしている。しかし、その事実は常に時代の社会的あるいは文化的な文脈の中で見直され続け、その解釈がまた関連する事実を生み出して、問題を拡大していく。ポスト社会主義後の文脈の中でその事実が人々にどのように再解釈されているのか、新しい解釈が新しい関係を構築するのにどのように寄与するのかといったことが議論された。

本研究会は2010年度から後半に入り、テーマごとに議論を深化させて、旧ソ連、東欧、モンゴルからなるソ連型社会主義を経験した地域のポスト社会主義以後を分析するために、必要な概念を整理し、理論的枠組みを構築する作業に入る。

ささき しろ

副館長、民族社会研究部教授。専門は文化人類学、特にシベリア、ロシア極東の先住民の近現代史研究。共編著に『東アジア内海世界の交流史：周縁地域における社会制度の形成』（人文書院 2008年）、『北海道内の主要アイヌ資料の再検討』（国立民族学博物館 2008年）など。